

所に用いられている。ただ難点は、唯物主義的歴史地理学の立場がとられているためか、帝都が有する古代の宇宙論による象徴性や、都市内部の社会集団の動向への言及が必ずしも十分でないことである。むしろこの点は、立場を超えて解明されなければならない課題でもある。

この書は、著者が既に発表した論文をまとめた論文集であるが、長期にわたる文革の混乱の後の、いわば研究の再出発の意味も込められていると感じられる。そのような意味でも、現在及びこれからの中国を代表する歴史地理学者の著書として、必読に値するものであると思う。（森口勝彦：筑波大・院）

龍瀬良明著 黒部川扇状地：大明堂，1981年，A  
5判 197頁，2,600円

著者は黒部川扇状地に生まれ育った。黒部川の扇状地は、著者をはぐくんだところである。著者はまた、黒部川扇状地で地理学研究的緒を把握し、研鑽を積み、ここでその研究を大成したのである。まさに著者の学究活動は黒部川扇状地に始まり、黒部川扇状地に至ったといえる。学位論文「わが国における低位生産水田地帯の地理学的研究」もここで生まれ、名著『低湿地』や『自然堤防』もこの扇状地を舞台に発展、今またこの著書でその大業を結んだものである。その意味では、この書は著者の研究の歩みであり、黒部扇状地開発の歴史ともいえるものである。わが国でも、急流中の急流として知られる黒部川が、巨礫を堆積し形成した広大な扇状地の土地利用の変遷、かつての瘦地が豪雪寒冷・単作などの劣悪な条件下で、現在の豊饒肥沃な耕地に変容するに至った経緯を余すところなく示しているのが、その内容である。以下、順を追って内容を紹介したい。

第1章では、「黒部川扇状地扇央における水田略史」としてあるが、まず、この書の全容を明らかにしたものである。

第2章は、新田開発を扱っているが、特色として指摘できる点は、黒部川扇状地の開田は近世の前田藩治政下における扇状地特有の傾斜地を利しての開発であるとしながら、富山県内の他の扇状地や、全国的傾向との比較考察を、千数百の開発事例から類型化することによって行っている点である。

第3章では、「低位生産水田地域の分布」と題して、黒部川扇状地の水稲収量の低さを、第二次世界大戦前後の比較を全国的視野から検討した後、低位

生産水田のうちでも最も注目すべき秋落水田について追究している。

第4章は、著者がこの書の中で最も力を注いだところである。すなわち、保水力増大・水温上昇・鉄溶脱防止をねらった戦後初めての、流水客土による土地改良という前代未聞の画期的方法についての詳察の項である。低水温と収量との関係を低地域の扇状地と比較したり、秋落と土壌との関係を化学的に究明したり、低地カバーのためには多肥農業しかとるべき方法のなかった点など力説しながら、他に類をみない高い水田率と、冷水害による低収量という潜在的悪条件の克服経過について論述している。さらに、自然的背景が必然的にもたらした多肥農業補助の水田裏作におけるレンゲ栽培や、低生産性の反映した早場米卓越現象と出稼卓越地域など、納得のいく論述がみられる。また、この章の後半に、流水客土実施の要因分析がなされている。戦前の多肥農業による増産成功がたどって、戦中・戦後の不相応な供出割当という結果を招いたこと、その窮余の一策が土地改良方法であったことなど、精密な調査統計資料に基づく考察が加えられている。

第5章は、経済の高度成長下における農業近代化具現としての圃場整備事業にとりくんでいる。戦前の耕地整理と戦後の圃場整備事業とを対比しながら、その目的・内容を細部にわたって検討し、工事の進展・地表勾配・農道整備・工費の重圧などの特徴を明確にしている。

最後の農業改善事業進展に関する評論では、農地の集団化・農具の大型機械化・労働投下力の効率化・圃場整備の進展など要を得た展開がみられる。

第6章は、昭和20年代における増産目的の流水客土から、高度成長期における農外収入目的の圃場整備・現代社会の需要の多様化に応ずるための水田汎用化に備える再客土についての論述である。水田汎用化をねらう再客土については、過去の流水客土との相違を明確にしながら、調査統計資料やアンケートなどによって客観的に評価している点が注目される。

以上、この書は、黒部川扇状地を凝視しての開発・土地改良・土地利用の歴史であるが、一面では、冷水対策との苦闘の歩み、耕地の高度利用、労働力換金化の実態を明らかにしたものであり、著者の郷土愛に基づく黒部川扇状地研究史でもある。

（菊池万雄・日本大）